



## 社会と経済

令和6年

黒田インターナショナルコンサルティング LLC

黒田 毅

社会と生活必需品の供与は過去において経済の現実であり、それらが経済の通念を形成し、存在したものである。しかし近代において経済が競争原理を与えられ、利益という源泉を抱く時その変化を有するのである。

これらは自由経済システムにおける現実であり、アメリカの大量生産と消費や、その先端産業の進歩性は今日既存経済システムの崩壊と変化を与えるものである。

これらは既存日本社会がその土着性を有し、既存価値観を守ることを理解する時、今日の変化は新たなグローバルスタンダードという新しい黒船なのである。

これらは既存社会システムがコンピュータという新しい現実において革命的な変化を有することを理解しなくてはならない。これは過去という既得権益の崩壊が存在するのである。

これらは固定化した日本社会において革命的な変化であり、失われた30年という現実は内部における社会転換と変化を如実に与えているのである。

それにおいて今日社会は新しい現実を自己とするものである。若年層における新たな生活スタイルはもはや否定できないのである。

また等しく未来という素速はその技術システムの進歩において必ず新しい未来という約束を有するのである。

これらは企業において明らかに未来という選択を強要されるものである。なぜならば既存システムの維持はもはや不可能であるからである。

新しい生産企業システムは明らかにその優れた生産性や効率性を行うものであり、世界における先端産業は如実にこれらを行うものである。

それら新たな企業要求や基準は全ての企業がこれを追従するものであり、これらが未来における新しい基準になることは疑いを得ないものである。



これらは企業経営における新たな経営視点を提案するものであり、これら新しい企業経営基準は、時代性や新しい現実への参加の必要性なのである。

これらが明らかに新たな現実であることから、企業経営の転換はこれら新しい基準と要求において求められるものであることは理解しなくてはならない。

これらは企業が新規企業基準において自己を新たに行うことを提案するものであり、既存の価値観や基準は今日それらの永続を得ないことは必ず理解しなくてはならない。

これら新たなグローバルスタンダードは、グローバリゼーションにおいて世界の全ての企業が共有するものなのである。

これらを牽引するのがマグにフィセント7である。彼らの先端性は全ての企業においてお手本であり目標なのである。

しかし企業経営においてはこれらへの盲信は必ずしも肯定されない。なぜならば、企業経営は理解という判断においてそれを求められるからである。その進捗性が時代性と独創性を可能とするものなのである。

これら変化は明らかにコンピュータにおける自動化という現実がより優れた企業環境を与えることなのであり、それらはもはや否定することはできないものである。

これらは手工業から自動化への転換が今日新たな産業革命として現実を与えていることなのである。

これらにおいて企業は新たな企業基準における自己転換を行うことで、新たな市場要求と基準をクリアし新たな時代と環境への参加を許容されるものであることは正しいと考える。

これらは新たな企業のシステムライゼーションであり、これらより優れた生産性や効率性は新たな企業英英基準としてその企業の自己転換を要求されるものなのである。